私らのところへ落ちたのは焼夷弾が１回だけでしたが、東京、大阪は何回もの空襲で焼け野原になったと聞いていました。

広島、長崎に落ちた原爆も特殊爆弾というくらいにしか知らされていませんでした。

空襲警報は頻繁に鳴りました。

ラジオで紀伊半島から尾鷲の上空を通ってＢ２９が進入してくるとよく聞かされました。

高射砲の砲弾もＢ２９に届かずにずっと手前でパッパッと破裂するのを見ていました。

私は昭和３年４月生まれで、２０年３月は旧制中学校４年生で１７歳でしたが、学校で勉強するのではなく、徳庵にある近畿車輛（当時は田中車両）へ勤労動員で狩り出され、３月末まで働いていました。

仕事は、車両を作る工程の鋳造に配属されました。

当時は金属類が不足していたので屑鉄を集めて電気炉に入れて溶かし鋳物を作っていましたが、車両の製造工程のなかでできた金属の破片はどんな物でも集めていました。

昼食は会社から出ましたが、卵ご飯かな、と思って食堂へ入ったらトウモロコシの混ざったご飯だった、というようなこともありました。

その年昭和２０年だけが繰り上げ卒業ということで、４年生と５年生が一緒の卒業でした。

兵役も２０歳から１９歳に繰り下げられた年で、近所では一つ年上の吉田さんが１９歳になった６月に召集され、８月１５日の終戦で帰ってこられたという時代でした。

私の家族は祖父母と両親、兄弟６人、姉妹２人、家族で戦地へ行った者はいませんでした。

防空壕は家の裏に４、５人は入れるくらいのものを掘っていましたが、空襲警報が鳴っても小さい弟、妹を先に入れて長男の私は入ったことがありませんでした。

田中車両で空襲を受けたことはなく、初めて空襲警報を聞いたのは旧制中学２年生の昭和１７年だったと思います。

艦載機が通り過ぎた後に空襲警報のサイレンが鳴ったのを覚えています。

戦時中でも、農家だったので食糧で特に不自由をしたということはありませんでしたが、満腹というわけにはいきませんでした。

米の供出制度があって、一般家庭は１人２合３勺、農家は３合３勺であったと思い